

中津市医師会報

平成29年12月

第55号



●中津医学史●

東京医科歯科大学学祖 島峰徹先生の出生地を訪ねて

社会医療法人 玄真堂 川島整形外科病院 理事長 川 島 眞 人

2017年5月28日、新潟県柏崎市（旧長岡藩）にて母校東京医科歯科大学歯学部第17回生の同級会（図1）が催され、幹事で同市内に住む吉野信哉氏から東京医科歯科大学の学祖で長岡藩出身の島峰徹先生（以下敬称略）についての講演依頼があり、家内と共に出席してきた。

島峰徹（図2）を調査している矢先だったし、彼の足跡を辿る良い機会だと思って出掛けた。会場である柏崎市の浪花屋夕凧亭は老舗のホテルで故田中角栄元総理が『日本列島改造論』の構想を練ったホテルとして知られている。当時の田中角栄が滞在した離れ屋は今なお保存されていた。

この長岡藩は1868年、戊辰戦争の頃、家老河井継之助に率いられ新政府軍と激突状態になりその戦いは北越戦争として有史に残る激戦となっている。この戦いの結果、長岡藩は壊滅状況になり、領内は焦土と化し、残された人々は困窮の生活を強いられていた。その時、長岡藩の支藩である三根山藩が米百俵（図3）を長岡藩に送って援助した。しかし、執政の小林虎三郎は「これをただ食べるだけなら一時の飢えをしのぐだけで終わりだ。しかし、これを売って国漢学校を創設すれば将来の人材育成のためになる」と言ってこの計画を実行した。その結果、長岡藩は明治維新後、陸軍の山本五十六元帥や東京大学の初代解剖学教授・小金井良精（図4）、陸軍の軍医制度を創設した石黒忠憲（ただとく）、日本医科大学の基となった済生学会を作った長谷川泰など東大教授だけでも十数人を輩出している。また医学史上においても優れたリーダーを輩出したことで知られている。

母校の学祖・島峰徹の祖父・島峰伝庵（1805～1880）は荒木家から養子として島峰家を継ぎ1880年に石地にて逝去している。その息子・島峰恂斎（じゅんさい・1840年～1899年）は長岡藩の藩医だったが1868年の北越戦争に軍医として従軍し、河井継之助を治療した事で知られている。そして戦後の1870年には長岡病院（現長岡日赤病院）設立にも携わったが、長岡藩の藩医として活躍した事で知られていたもので追われてしまい1875年、石地で開業した。しかし、その後も落ちつかず佐渡長岡鉾山病院長になったり長岡神田町で開業したりしたが最終的には1885年片貝村で開業し、1899年、結核のため59歳で

逝去した。1877年4月3日、島峰徹は恂齋の息子として石地で出生し、父と一緒に転々と移転したが、父の最後の開業地であった片貝村で少年時代を過ごした。高等小学校時代は“破竹組”と称して自ら隊長となって爆竹を鳴らしたり畦道を壊したりする腕白小僧だった。しかし、成績は優秀で1896年、19歳で県立新潟中学校（長岡中学校が学制の変遷で校名が変わった）を卒業。海軍兵学校に合格するも父の反対で入学せず、東京法学院（現中央大学）に合格したがここも父の反対で断念。ようやく金沢医学専門学校に入学したが1年で退学し東京帝国大学を目指すために1897年、第4高等学校に合格して入学した。しかし、1898年、父恂齋が結核で急死し、自分も結核になって休学。貧窮のどん底の中、母シゲと弟恂が掘立小屋で乳牛を飼い、牛乳を売って徹の学資作りに苦闘した。借金もある極貧の中で東大を受験した。このような徹の窮状の中、隣家の代々石地の村長で酒造り問屋だった内藤久寛（後の日本石油創業者）が救世主のように現れて島峰徹を救う事になった。内藤久寛（図5）は家業の酒造りが窮乏した時、機械掘井戸に成功して海底油田を開発し、また新潟鉄工を興すなどして石油王となった人物である。この内藤が1901年に東京帝国大学医科大学に合格した隣家の島峰徹の学資金を援助した。更に1905年に卒業後、東京帝国大学の大学院に入り、長岡出身の小金井良精の主宰する解剖学教室に籍を置きながら1907年、小金井の示唆に寄りドイツのベルリン大学医学部歯学科へ留学した。内藤はこの私費留学も援助し合計8年間に渡り援助し続けた。島峰はドイツで歯髄炎の研究により1909年、第2セメント質を発見し論文を発表した事から今日の歯周病学の遠祖と言われている。同年にブレスラウ大学に移りパルチュウ教授から歯牙病理組織学を学び、傍ら保存療法学科でも研修に励み学位論文の“セメント質”に関わる論文を発表した。その後、同大学解剖学教室のクラーチ博士の下で医化学を研究し、1911年、パイファー教授の下で“口腔細菌並びに梅毒の純粋培養の研究”をして三つの論文を発表した。特にスピロヘーター（梅毒）の純粋培養では1912年に成功し、野口英世よりも早く発表していて、島峰の名声はヨーロッパ中に広まった。そして同年にはベルリン大学の歯牙保存療法学科の主任として招請されている。1914年にはロンドンにおける万国歯科医学会に日本代表として出席している。その後、ペンシルバニア大学、バルチモア、ワシントン市、ニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコなどアメリカ各地の歯科学校、大学を見学し、歯科教育や試験制度を調査して1914年に帰国した。しかし、東大の前任の教授だった石原久と反りが合わず冷遇されて東大を出ることになった。そして1915年、雑司ヶ谷の医術開業試験付属病院である永楽病院（図6）の歯科医長を任じられた。1917年永楽病院から歯科が分離独立し文部省歯科病院が設立されると徹は院長に就任した。すると1918年～1920年にかけて東大の石原教授の下にいた長尾優や永松勝郎、高橋新次郎、桧垣麟三、

加来素六、弓倉繁家、川上政雄、金森虎男などがこの歯科病院に集まってきた。

そして1919年には文部省の臨時教育委員会で歯科高等教育機関を設置すべきという付帯決議が出され、1928年に長尾優、金森虎男らに擁立されて東京高等歯科医学校校長に就任した。そして多くの歯科大学の人材を供給、支援を行った。1929年4月20日に第1期生100人の入学式を行い授業は東京商科大学の校舎の一部を借りて行った。1930年、お茶の水の東京女子高等師範学校跡に移転し、1944年には医学部が併設され、東京医学歯学専門学校と改名された。これが日本最初の国立の歯学校として設立された後の東京医科歯科大学の前身である。

島峰徹の帰朝以来、東大歯科学教室との険悪な関係は1934年に東大医学部長の長与又郎が島峰に公認の推薦を依頼した事で改善され、金森虎男が東大教授に就任した。その後、東大と東京高等歯科医学校は人事の交流をするようになった。

1940年、すべての歯科医学専門学校9校の共催で皇紀2600年の祝賀記念を行うための大規模な学会を開催し、島峰が会長を務めた。その学会で私立歯科医専を背負って苦闘してきた血脇守之助（東京歯科大学創設者）と中原市五郎（日本歯科大学創設者）の2名に島峰から万雷の拍手の中で表彰状が贈呈された。島峰徹はこの時がまさに歯科の頂点に立った時だった。

門下生の長尾優は1929年に東京高等歯科医学校教授に就任し島峰の後に続いた。1944年、同校に医学科が併設され東京医学歯学専門学校となった直後の1945年2月、島峰が死去すると2代目の校長になった。今日の東京医科歯科大学の礎を築いていった人物である。

もう一人の門下生の川上政雄は東京高等歯科医学校の補綴学（ほてつがく）教授となったが、彼の妻、川上みね（図7）は東洋女子歯科医学専門学校附属病院長を務めた。この2人の子である川上道夫は東北大学歯学部名誉教授であり歯科理工学者でもあった。

島峰徹は酒を愛し、和歌や漢詩、そして書道（雅号は東流）をたしなむ風流人でもあった。1945年（昭和20年）2月10日、肺結核で現職のまま逝去。享年68歳であった。戒名は東流院釈徹信居士として長岡市高瀬町の妙楽寺の先祖の墓（図8）の中に葬られている。私は歯学部と同級生と共に小千谷の片貝村を訪れこの島峰徹の父・恂齋の墓（図9）と記念碑に参拝しに行ったところ、何とその墓の裏手に中津出身の横井豊山の墓（図10）を見つけた。江戸時代、長岡藩が耕読堂という学校を作り多くの優れた学生を輩出する基礎を作っていたが、この耕読堂の校長を務めていた人物で、この地で亡くなっていたと思われ、りっぱなお墓が残されていた。

更にこの島峰家の菩提寺である妙楽寺（図11）を訪れたところ“変化に適應する”と“一

尺進み一寸下がる” という意味の言葉を直筆で書いた書が扁額として飾られており、その創造的具現者であり、具体的な実現者で、天才的な人物であったと鈴木浩一郎が歯学部同窓会の雑誌に述べている通りの優れた人であった事に感謝をこめて参拝した。

本論文を書くにあたってご指導を賜った大分大学名誉教授・玄真堂名誉院長の清水正嗣先生に深謝いたします。



図1 東京医科歯科大学 歯科17回生同級会



図2 島峰徹

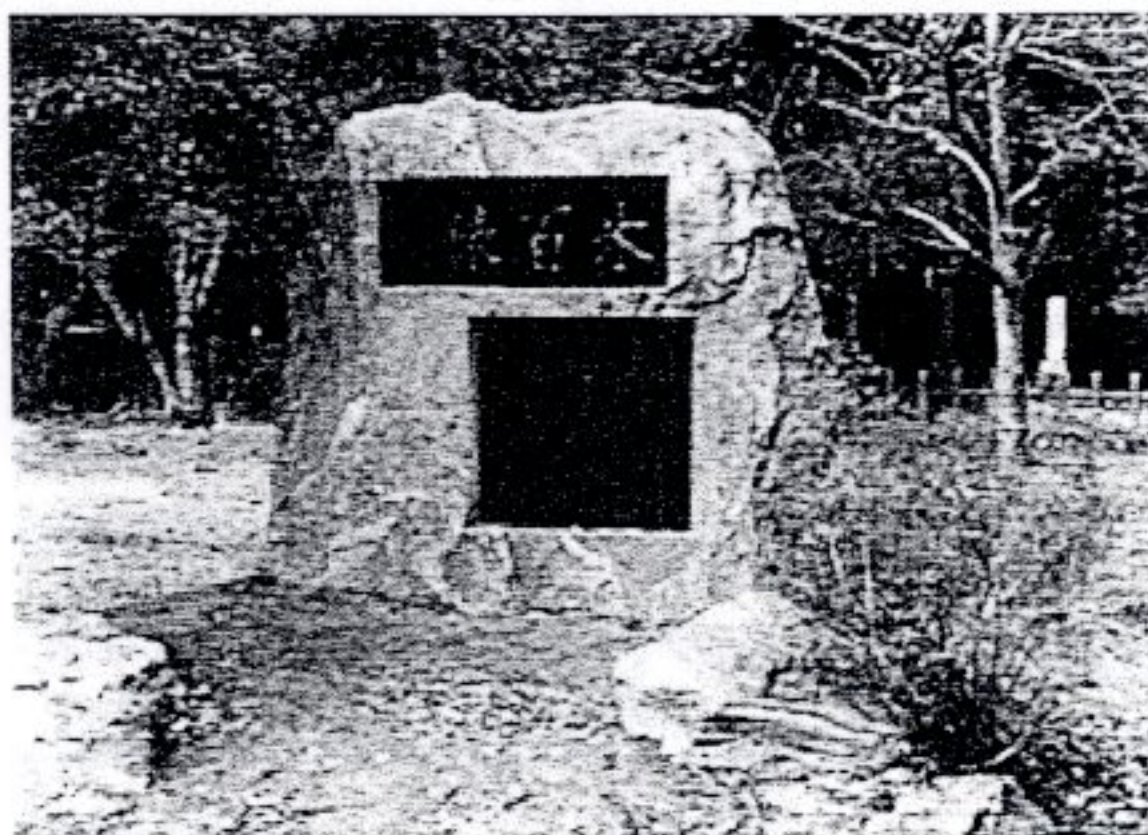


図3 「米百俵」の顕彰碑



図4 小金井良精



図5 内藤久寛



図6 医術開業試験付属病院＝永楽病院



図7 川上みね



図8 島峰家及び徹の墓

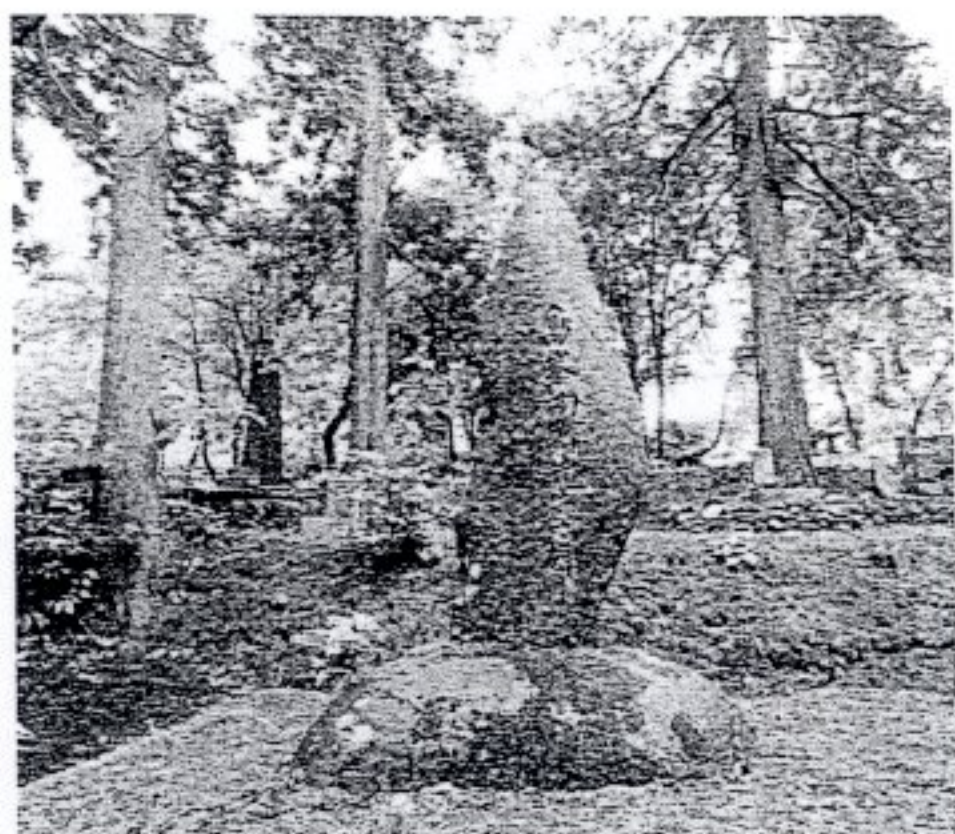


図9 島峰恂斎の墓



図10 横井豊山の墓



図11 島峰徹の菩提寺 妙楽寺